

第4回 古川秀昭氏

岐阜県博物館協会ひと部会では令和4年度から「岐阜県博物館界の先達へのインタビュー」を行い、動画や読み物として公開してきました。

この活動では、学芸員や館長として博物館・美術館で様々な仕事を経験され、当協会の活動に関わったり、関心を寄せたりされた方々にお話を伺ってきました。

その趣旨は、学芸員、博物館、当協会などに関して、これまでの体験や、これからへのご意見を聞き取り、協会会員の皆様に参考や励みにしていただくというものです。

第1回は当協会の元会長、若宮多聞氏、第2回は自然観察家の小野木三郎氏にインタビューし、動画でお伝えしました。第3回は愛知県陶磁美術館総長の伊藤嘉章氏のお話を、読み物でご紹介しました。このたびは、岐阜県美術館元館長の古川秀昭氏から、画家兼学芸員の視点や館長の経験に基づいて、美術館や当協会について、多岐にわたるお話を伺いました。

その記事を、前中後3編に分けてお伝えします。

古川秀昭 略歴

OKBギャラリーおおがき 館長、洋画家。
旧満州奉天市（現瀋陽市）出身、東京育ち。
1964年、東京藝術大学 美術学部 油画専攻に入学（山口薫教室）。
1968年、卒業後、岐阜県大垣市に移る（後に岐阜市に定住）。
元 岐阜県美術館 学芸員・館長（2003年度～2014年度）。



（聞き手：ひと部会長 岡田 潔（岐阜県現代陶芸美術館 学芸部長、元 岐阜県美術館 学芸員）

■ 前編

■ 画家として、学芸員への歩み

一 美大に学び、画家になった経緯について教えてください。

高校3年までは医者になるつもりだった。担任の先生も家族の者も「アイツは医者になる」と思っていた。夏休みに入る直前の誕生日に、気が合わなかったお袋が、何を思ったか、油絵具の大きいセットをくれた。母は体が弱く、診ていた医者二人が、趣味で絵を描いていた。母は、医者みんな絵を描くと思っていた。「何これ」と言って、プレゼントを開けたら、変な臭いがした。昔の絵具はチューブのおしりから黄色い油が滲み出ている、その臭いだった。これを知りたいと思った。すぐ画家になろうとは思わなかったけど、面白そうな世界だと思った。

私の家族は中国からの引揚者で、引き揚げて間もなく、私が4歳頃から9歳まで函館にいた。絵具箱をもらった次の日くらいから、函館の風景を描きたいと思った。1週間後には、函館にいた親戚の

医者に会うと理由をつけて、函館に行った。そして、何にも頼らずに、初めて油絵を描いた。それで、帰って来た時に、絵描きになろうと思った。短い期間になぜそう思ったのか、自分でも分からない。絵描きの本を見ることも全くなかった。ただ、絵具をいじって描いてみることに興奮していた。

9月になって学校が始まった時に、進路変更を申し出たら、優しい担任の先生が激怒した。先生としては、二人いた医者志望が一人減るのが、残念だったのだろう。家の中は生き地獄だった。狭い家で、一言もしゃべらなかつた。美術大学があることも知らなかつた。美術の先生からは「とんでもない考えは捨てろ。俺は美術の専門家として、お前の言っていることがどれだけ頓珍漢なことか、よく分かっているから」と言われた。余計なお世話だと思った。そういう一つひとつのことから、逆に、絵描きにならざるを得ない、という思いが高まっていった。予期せぬ絵具箱をもらったことで、予期せぬ方向に行くことになった。

一 東京芸術大学時代、将来につながる有意義な学びはありましたか？

油絵をある程度学んだ時、これほど表現の幅があるものは他にないと思った。パステルや水彩と比べて、油絵の技法の方が面白くなった。2年生になって、半年間、版画と壁画に分かれる際に、版画をやりたいかったが、申し込むのを忘れて壁画になった。そこにいたのが ^{やばしろくろう}矢橋六郎 [註 1] と ^{しまむらみ}島村三

^{なまお}七雄 [註 2] という教授だった。最初の3ヶ月は島村三七雄からフレスコを、あとの3ヶ月は矢橋六郎からモザイクを教わった。フレスコは油絵と違って、水性だし、技法として歴史がある。元々、水彩に親しみがあって、面白いと思った。

大理石のモザイクが始まったら、触ったことのない石で、これも面白いと思った。石だから細かいこともできず、トンカチで割って、60号(1303×970mm)くらいの板に敷き詰めた。矢橋さんは岐阜県大垣市の矢橋大理石商店 [註 3] の重役で、会社で余った石材を芸大にいっぱい運んでいた。矢橋さんが世界中から集めた40種類くらいの石でやるモザイクは、素材としても面白かった。これには魅せられた。図書館で、古代ギリシャやローマの大理石モザイク壁画の画集をいっぱい見た。

与えられた大きさを見た時に、「こんなのは壁画とは言えないよな」とつぶやいたら、後ろに矢橋六郎がいた。「偉そうなこと言ってるけど、本物の壁画を見られるぞ。大垣の会社で今でっかいのをやっているから、その気があるなら見て来い」と言われ、次の日に行った。3m×40mのモザイクを作っていて、「これは壁画だ」と思った。矢橋さんが戻って来ていて、「本当に来たんだな。2~3日やっていったらどうだ」と言われて、モザイク壁画の制作に参加した。会社の人達が石を並べている中で、やらせてもらい、面白くなって4~5日やった。矢橋さんが会社の寮に部屋を取ってくれて、食事も用意してくれた。帰る際には、往復の旅費と日当をくれた。

それ以来、味をしめて、大垣に通うようになった。モザイクが出来て広がっていく面白さは、油絵なんか問題にならないと思うくらいだった。4年生になるまで、油絵の課題を最低限やりながら、大垣に通った。矢橋六郎と芸大で同期だった ^{やまぐちかおる}山口薫 [註 4] が私の担任教授で、「矢橋君の所に行ってるんだって？良い勉強になるよ」と言われたので、堂々と大垣に行けた。卒業したら、矢橋大理石で壁画を作ろう、という志を持っていた。山口薫からも「卒業したら矢橋君のところに行くのが良いよ」

と言われていた。同時に「モザイク壁画をやりながら、油絵は続けた方が良い」とも言われた。矢橋六郎、山口薫、^{むらいまさなり}村井正誠 [註 5] という同期の作家たちが、戦後まもなく「モダンアート協会」を結成していた。担任の助言から現在に至るまで 60 年近く、モダンアート展に油絵の作品を出し続けた。壁画は 10 年くらいの間に 20 作品くらい作ったが、じきに、モザイクはあんまり面白くないと思うようになった。

.....

註 1 矢橋六郎 (1905-1988) : 岐阜県大垣市の出身。山口薫、村井正誠らと共に、自由美術協会やモダンアート協会を結成。武蔵野美術大学や東京芸術大学で教える他、岐阜県教育委員長も務めた。

註 2 島村三七雄 (1904-1978) : 洋画家。東京芸術大学を卒業。フランス留学時にフレスコ画を修得。東京芸術大学教授。独立美術協会会員。

註 3 矢橋大理石商店 : 1901 年、岐阜県大垣市に、同地に産する大理石を中心に、一般石材の加工・販売・工事を請け負う会社として創業。1986 年に矢橋大理石株式会社と改称し、現在に至る。

註 4 山口薫 (1907-1968) : 洋画家。文化学院や武蔵野美術大学の講師、東京芸術大学教授を務めた。

註 5 村井正誠 (1905-1999) : 岐阜県大垣出身の洋画家。川端画学校にて、盟友となる矢橋六郎、山口薫らと出会う。文化学院大学部美術科卒業。文化学院講師、武蔵野美術大学名誉教授。

一 学芸員になるまでに、美術館の仕事に関係した経験はありましたか？

芸大では 2 年生まで油絵科と芸術学科が同じ授業を受けることが多く、両科で 70~80 人いたが、芸術学科から多数、博物館や美術館に就職した。私はそんな進路は全然考えていなかった。美術館に関わるようになったのも、予期せぬ出来事だった。(1968 年に東京芸大を卒業した後、岐阜県に移り住んでからのことだった)

矢橋六郎の実業家仲間に、大垣共立銀行頭取の^{つちやひとし}土屋 斉 [註 6] という人がいた。1974 年か 75 年頃、大垣市に文化会館が出来ることから、地元の文化人を集めて「美術振興懇話会」が作られた。土屋さんと矢橋さんが「東京から岐阜県に来てブラブラしているのを使ってやれ」と言って、懇話会に私も入ることになった。土屋さんは懇話会のメンバーに、文化会館の活用案を求めた。展覧会でも講演会でもコンサートでも何でも良かった。私は、^{うめはらたけし}梅原 猛 を講演会に呼び、懇話会メンバーでグループ展を開く、という企画を提案した。提案したことは何でもやらせてくれた。それが生まれて初めての文化事業だった。「学芸員」という言葉も知らなかった。懇話会には 8 人のメンバーがいたが、それぞれの担当事業をお互いに手伝った。^{かわいゆうじ}河合 祐司 という洋画家は ^{はくいん}白隠 [註 7] の展覧会を企画した。白隠の軸を色々なお寺や個人から借りるのを手伝ったが、それはまさに学芸員の仕事だった。



そういう催事を 3~4 回やった時に、岐阜県に県立美術館ができるという発表があった。矢橋六郎が県の教育委員だったこともあり、私の知らない間に、矢橋さんや土屋さんが、岐阜県美術館開設準備室の学芸員に私を推薦していた。私が岐阜市柳ヶ瀬の百貨店で個展をしている時（1979 年）に、県庁の人が来て、「あなたを推薦している人がいるので、明日面接に来てください」と言った。学芸員に興味は無かったが、推薦してくれている人がいるならと思い、面接に行くことにした。翌日、面接の時間を忘れて、約束の 1 時間後に着いたら、皆怒っていた。「もうだめだ」と思い、かえって安心した。40 分くらい面接を受けた。そして家に帰ったら、なぜか採用が決まっていた。電話で「明日から準備室に来るように」と言われた。何が何だか分からなかった。

.....
註 6 土屋齊（1907-2003）：岐阜県出身。大垣共立銀行名誉会長、岐阜県名誉県民。「ぎふ中部未来博覧会」会長や岐阜県公安委員会委員長なども務め、地元の経済・福祉等の発展に貢献した。

註 7 白隠慧鶴（1685-1768）：静岡県沼津市出身の禅僧。臨済宗中興の祖。各地を行脚後、地元で松蔭寺の住職を務めた。各地で講義を行う他、膨大な著作や書画を残し、様々な方法で法を説いた。

一 画家と学芸員の関係について、どのように考えてきましたか？

作家と研究者

学芸員とか美術史・美学をやってる人たちが、作家について書く批評・評論に対して、私はいつも物足りないものを感じていた。作家の意図などは、作家が言ったって、人々はたぶん分からない。学芸員・美術史家・評論家は、もちろん美術館にとって大切だと思っている。けれども、各美術館に作家が 1 人くらい居ていいと思う。今でもそう思ってる。作家が評論家に「こんなのダメだ」と言われても、公募展に落ちようと、作家はそれを描かざるを得なかった、作らざるを得なかった、ということがある。美術史家や学芸員は、そのことに気がつかない。「作家がそうする理由は何だろう」と思い続ける人が、美術館や博物館に 1 人は要るのではないか。

欧米での作品収集の決め方

20 回くらい海外出張させてもらったけれど、ヨーロッパやアメリカで何度か、キュレーターになる際の話になった。そんな時、「私は絵も描いています」と言うと、皆びっくりする。「日本ではそれが出来るのか」と言うから、「そう。私はあえてやっている」と答えた。アメリカでもイギリス、フランスでも、キュレーターになる時には、「コレクションはしない」「作品を作らない」ということを守らなければ駄目だという。今でも多分そうだ。やっぱり美学と美術史が大事なんだ。

アメリカでは、作品の収集を決めるのは、キュレーターというよりも、理事会や寄贈者だ。いい作品だと判断するのは、みんな寄贈者。ビル・ゲイツがアンドリュー・ワイエスの作品をどこかに寄付した時、ニューヨーク近代美術館は「ワイエスは要らない」と言った。ビル・ゲイツがどれくらい真剣なコレクターか、当時、キュレーターたちは知らなかった。

メトロポリタン美術館で織部展**[註 8]**をやった際に、この美術館の収集委員会にオブザーバーで参加させてもらった。提案者はキュレーターじゃない人が多い。作品が出てくると、それを徹底的に調べるのは別の職員だ。キュレーターは、いろんな展覧会を見に行つて、情報は得るけれ

ど。「これを」と作品を勧めるのは、画商とかコレクターだった。そういう人たちが「どうだ」って言う作品に対して、審議する。

.....
註8 「Turning Point —Oribe and the Arts of Sixteenth-Century Japan」展、2003年10月21日～2004年1月11日、ニューヨークのメトロポリタン美術館で開催。岐阜県の事業で、岐阜県美術館が中心になって準備した。

作家系の学芸員の長所

私は、例えば彫刻家の小清水漸の作品を、岐阜県美術館の準備室の時に提案して、入れた。小清水が平櫛田中賞を取った時に、東京日本橋で展覧会をやって、木彫レリーフが出た。私はその作品がすごくいいと思ったので、「収集委員会にかけたい」と言ったら、学芸員がみんな反対した。岐阜県に關係ない作家を優先できない、と。しかも、小清水はまだ若い、と。37、8歳だった。私は「岐阜県は木の国だ」とか、こじつけて、その作品を推した。

収集委員会の時に、委員の本間さん[註9]が「なんでこれがここにあるの」「よく見つけたね」と言った。「それいくらか」と聞かれ、「30万円だ」と答えた。すると「それはいかん。日本の美術館は安い評価をするから駄目だ。作家が育たん。最低倍だ」と言うから、60万円になった。その後も小清水の作品を収蔵し、彼のいい作品は岐阜県美術館にある。私以外の学芸員では、彼のような作家は収集対象に出てこなかったね。

油絵でも、大垣市内の個人蔵だった、^{あいみつ}鬚光の《花園》という作品を、矢橋さんの所に通っている時から知っていた。「とんでもない絵がある」と思っていた。鬚光のことを知らなかったけど、東京国立近代美術館が鬚光の絵を1億円で入れたというニュースを見て、「あの作家だ」と思い出した。岐阜県にあるが、持ち主は売る気もない。「では寄託で」と所蔵者に言って、開館の時に岐阜県美術館に入った。作家系の学芸員が作品情報を持っている場合、気になっている作品を、収集の機会に、他の学芸員とは異なる視点で思い出せる。美術史的に美学的に展覧会を見ている学芸員とは違って、あれだけとは、作品の質などへのこだわりを持って思い出す、という所がある。

.....
註9 本間正義（1916–2001）：美術史研究家、美術評論家で、美術館事業に貢献。東京国立近代美術館の勤務を経て、国立国際美術館の初代館長、埼玉県立近代美術館の初代館長を歴任。

■ 中編へ続く